最近の近畿圏大学博物館事情

―平成23年度大学博物館調査から―

石　立　弥生子

大学という組織において、博物館はいかにあるべきか。現在、少子高齢化時代の生き残りをかけて、全国的に博物館の設置に関心を持つ大学が増えており、リニューアルや新設が相次いでいる。

前身の考古学等資料室から数えて50年以上の歴史をもつ関西大学博物館で働く者として、伝統に甘んじることなく、これからの方向性を考えたいと思い、近畿圏の約20館を見学する機会を得た。

本館は平成６年に博物館法に基づく博物館相当施設の登録を受けている。全国で750以上ある国公私立大学のうち同様の博物館を持つ大学は全体の約１割程度である。ただ、類似施設も含めると、総合系、歴史系、自然科学系、美術系、動植物系、水族系など多彩な館種の大学博物館が、平成23年10月現在で260館を超えて存在する。平成13年に株式会社トータルメディア開発研究所「日本の大学博物館」が行った大学博物館調査で115館だったものが、この10年で倍増したわけである。(「ユニバーシティ・ミュージアム研究の現状」九州産業大学美術館　緒方　泉)

そもそも大学博物館に関心が向くようになったのは、平成８年（1996）１月、学術審議会学術情報資料分科会学術情報資料部会「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）」で、大学博物館を研究拠点であるとともに「『社会に開かれた大学』の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設でもある」と定義したことからである。

長引く経済不況から、文化面の充実は二の次とされがちだが、そういった苦しい時期であるがゆえに社会をリードする大学として、開かれた施設である大学博物館をうまく利用することは、大学のPRや独自性の開発にもつながり、これからの厳しい社会情勢を生き抜くための一つの施策となり得る。

特に京都では、大学の規模にかかわらず博物館施設設備の整備が進み、活発な展示公開や研究、市民講座などが行われており、まさに地域における文化拠点として、大学博物館が活用されていると感じた。見学に赴いた際にも、正門や主要通路のあちこちに、誘導掲示や行事案内が目立つように設置された大学が多く、不案内な者でも簡単に入場できるように配慮されていると思った。

大谷大学博物館

文化や教育に興味関心の高い一般市民が、大学博物館を訪れることは、展示資料の鑑賞以外にも副産物を生みだす。大学キャンパスや施設に対する印象は、入学志願者数に直接・間接的に結びつくであろうし、各種の意見は、大学の改善にも貢献する。

京都では、2011年度に京都市内外にある13大学14の大学博物館が連携して「京都・大学ミュージアム連携」を立ち上げた。実行委員会の委員長館である京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、本学の学舎建築の多くを手掛けた村野藤吾の建築設計図面を多数収集していることでも有名である。ここでは、年間６～８回程度と頻繁に企画展を開催しており、私が来館した際にも、常設展以外に２つの企画展を並行して開催してい

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

た。その展示内容は、初心者でも分かりやすく楽しんでみることができる一方で、最新の研究成果の公表や学生の参画を可能とするものとなっており、大学博物館として、教育・研究・社会貢献の３つのバランスがうまく取れていると感じた。

この連携には京都大学総合博物館をはじめ、立命館大学国際平和ミュージアム、花園大学歴史博物館、大谷大学博物館、京都精華大学京都国際マンガミュージアム、龍谷大学龍谷ミュージアムなど個性豊かで、活発な社会活動を行っている館が参加しており、今後の活動が期待される。

大阪大学総合学術博物館

ひるがえって、本館が位置する大阪であるが、大学数自体が京都と比較して少ないこともあり、大学博物館に対する関心が、関係者からだけでなく周囲からも薄いように感じた。ただ、大阪医科大学が2007年に歴史資料館をオープンし、大阪商業大学が今年度１年間かけて商業史博物館を改装するなど、博物館を活用する機運は高まりつつあると感じた。

本館も含めて大阪大学総合学術博物館や大阪大谷大学博物館のように入館無料のところも多く、キャンパスや周辺の散策も盛り込んで、大学博物館を拠点に戦略的に活用することで、地域の活性化につながるのではないか。

そんななかで豊中市にある、大阪音楽大学音楽博物館は、ユニークな活動を続けている在阪の館の一つであると感じた。広い空間に多数の音楽関連資料を展示することで、観覧者の興味関心を刺激し、貴重な楽器もオープン展示して実際に演奏することができる。また、展示室内には学生スタッフや学芸専門職が常駐しており、観覧者が声をかけやすい雰囲気作りができている。音楽専攻の修学旅行生をはじめ、国内外を問わず積極的に団体見学者を受け入れており、専門分野の解説や演奏会、研究活動など、活発に社会貢献活動を行っている印象を受けた。

大阪音楽大学音楽博物館

京都・大阪以外では、関西学院大学が、創立125年となる2014年の開設に向けて博物館開設準備室を立ち上げ、現在年２回程度の展示会を開催している。また、天理大学附属天理参考館の充実ぶりはいうまでもないが、奈良大学の博物館実習施設も大変充実している。

2012年度から施行される学芸員養成課程の新カリキュラムでは、積極的に「学内の附属博物館等」で「大学等が有する学術標本や研究資料等の資源」を活用した博物館実習を行うことが望ましいと明言している。「学の実化」を学是とする本学では、従来から行ってきたことであるが、一般公開施設としてだけでなく、本来の教育・研究面においても、大学博物館の充実は今後ますます必要とされてくるであろう。

今回の博物館調査を行うことで、本館の環境の良さを改めて感じたことは大きい。本館所蔵の本山コレクションは、2011年６月に登録有形文化財に登録されたが、これは国内の大学が保有する考古コレクションとしては初となる快挙である。また、歴史に興味があって本館を訪れる来館者には、自然豊かで活気ある大学の雰囲気（施設・設備・学生気質）を直接・間接的に感じてもらうことができる。

ただ、現状では十分な研究体制がとれず、残念ながらせっかくの資料を活かしきれていない。優れた資料を死蔵させることなく、広く教育・研究に活用してこそ、これからの大学の発展が望めると考える。先人の残してくれた遺産を十分顕彰して、これからの大学全体の発展への呼び水となるよう、博物館施設・設備の充実や研究体制の整備を行うことが喫緊の課題の一つであると改めて強く感じた調査となった。

関西大学博物館学芸員